

# 正直正太夫死す

今年今月今夜、星江東に殞つ、雲昏く雨暗し、たづねれば我親愛なる正直正太夫の、活はんなかな家僮伯、ひよつくり鶴と化しけるなり、あかな痛ましの殿が身や、薙露を歌はんか、蒿里を唱へんか、題目か念佛か、神樂がお好きでトツトやくたいなる最期を遂げられたること、重々惜しき限りなり、況んや誰あつて碑する者なく、空く肝痛玉を存んで、骨を日暮里に焼かるゝに於てをや、魂魄さまよふ所、遺憾盡くるなからん、仰ぎ願はくは佳人才子、其花に濺ぎ其月に啣つの涙を分けて、これに手向けの水心、聊か弔ひ給はらば、渠も兎角は武士の果、七世の後に於て、豈魚心の無しとせんや。

我之れを何かに聞く、勁松は歳寒に韋れ、貞臣は國危に見ると、宜なり正太夫、文壇亂れて細細の大家多く、附焼小説世を惑はすの目、疾風迅雷我無洒落に出で来り、一喝一棒大いに其邊を騒がせり、是れ誠に勁松なり、是れ誠に貞臣なり、されども竊かに渠が呪の裡を窺へば、學淺く識狭し、内に玲瓏の機智なく、外に花

藻の文章なく、つまりがタウの野郎なり、多寡がひとりの子僧たり、腕強きにあらず、刃が鋭きにあらず、七緋八襦袢廻りたりと見ゆるも、實は目指せる大家諸氏の、思つたよりも沈黙にましまし、賢子何かあらんと目もくれ給はねばなり、其無名菌の名を辱うしたるが如きは、ソリヤあんまりな間違のみ、はやまり過ぎたる鑑定のみに、さるにても頃る文壇靡なく色なく、醉へるが如く眠れるが如し、正太夫敵手なきに倦きて、猛虎は伏肉を喰はずと稱し、遁れて植生の小屋にツクネンたり、一日天を仰いで歎じて曰く、俳諧論を誦せんか、新體詩を學ばんか、寧ろ叡山に登つて腹かツさばかんと、何がしが贈れる善馬劍を撫して五色の息良久しうしたりしが、しんぞ命もと絶る者もなく、アレ寐なんすかと呼ぶ者もなければ、正太夫の目算こゝに懸臨し、忽ち西方に向つて學を合せ、是れ天地の委形なりと、莊子が夢の餘味言、溘然永訣を告げたり、奇と謂ふべし。

逝きぬ、正太夫は逝きぬ、十萬億里の旅の空、

鐵道の設未だあらず、死出の山風笠を吹き、三途の川浪舟を喰む、苦難思ふもあはれなり、右せんか極樂、左せんか地獄、正太夫の墮つる所いづこなるべき、嘗て劍を揮つて人を斬れり、さては地獄ならんか、斬りし人を助けんが爲なり、さては極樂ならんか、何たる因果ぞ正太夫死んでの後迄問題となる、南無阿彌陀佛妙法蓮華經。

明治二十三年八月二十二日の夜、

鐘と撞木のあひが鳴る時

正直正太夫自ら記す